

音の散歩路

～サウンドは大きくなっててもよい～

聖徳大学音楽学部教授（音楽学）

お茶の水女子大学名誉教授

一般財団法人カワイサウンド技術・音楽振興財団 音楽振興部門審査委員

徳丸 吉彦



1. 犬から教わるサウンドの大切さ

2011年東日本大震災の直前に子犬のタロウが我が家にきました。0歳のトイプードルです。震災の時は震えていました。

タロウとの付き合いから、私はサウンドを考えるようになりました。タロウは生活の中のサウンド、音楽のサウンド、自然のサウンドのすべてに反応します。例えば、食器を洗う音です。私はタロウが来るまでは、小さな音で食器を洗っているつもりでした。しかし、食器を洗い始めるとすぐにタロウが部屋を出ていき、また、鍋などの金属製のものを洗いだすと、タロウが別の階まで逃げるのが分かり、それからは、タロウが逃げないようにさらに静かに洗うようになりました。

家内はピアニストなので、毎日かなり長い時間ピアノを弾きますが、タロウはおとなしく聴いています。一曲が終わらないと毬投げをしてもらえないことが分かったようです。フォーレの長いピアノ曲についても、終わりを覚え、終わりそうになると、自分の居場所からピアノの方に鞆を咥えて向かいます。タロウはブラームスの《ハンガリー舞曲》、とくにその第5番が気に入っているようで、特定の場所にくると、

声を出します。ピアノのサウンドからは決して逃げませんので、嫌っているのでも、怒っているのでもないように見えます。

私が床に座って三味線や箏を弾きますと、タロウは近寄ってきて一緒に弦をはじこうとしますが、決して逃げません。あるとき、東京の紀尾井小ホールで私が企画している演奏会で、吉沢検校の箏曲《千鳥の曲》を箏と尺八ではなく箏とヴァイオリンで上演することにしました。ヴァイオリン・パートをNHK交響楽団のコンサート・マスター篠崎史紀さんに依頼しました。初代中尾都山が1906年にこの曲のヴァイオリン譜を公刊していますので、それに準拠することにして、篠崎さんに渡す前に楽譜を検討するために、私もひさびさにヴァイオリンを取り出して弾き始めました。そうすると、タロウはすぐに部屋から出ていきました。その話を篠崎さんに話したら、「せめてタロウちゃんが逃げ出さないくらいに練習をきなさい」と言われ、その後すぐに篠崎さんの『バイオリン 絶対うまくなる100のコツ』（ヤマハミュージックメディア、2015年）という本を頂きました。それを読んで反省しましたが、まだタロウの前ではヴァイオリンを弾いていません。

タロウが成長するにつれ、私の聴覚が衰えて

きました。そのため目覚まし時計の音に気が付かないことがあります。最近、時計の音が鳴ると、タロウが私の頭を突っついて教えてくれます。また、私が玄関のベルに気が付かないでいると、タロウが吠えて教えてくれます。耳に関しては、私がタロウに介助されています。

外を一緒に歩いていると、鳥の声にはタロウの方が私よりも早く気が付きます。我が家の近所では、夕方の5時になると、外のスピーカーから《夕焼小焼》の旋律が流れます。たまたまスピーカーの側にいると、タロウは大きな音量に驚き、スピーカーの場所から遠くに行こうと私を引っ張ります。

このことから、私は音量の問題をますます意識するようになりました。

2. 音量の適切さ

タロウが家に来るまでは、私は耳がよかったので、大きな音量の音楽より小さな音量の音楽が好きでした。ある時、東京の新国立劇場でオペラを観ていましたら、ある歌手の大きな声が私の座っている場所に正面から届きました。しばらくすると気分が悪くなりました。隣に座っていたオペラの専門家に「声量が大きすぎて落ち着かないので、この幕で帰ります」と言いましたら、啞然とされましたが、私は我慢できなかったので、劇場から出ました。

オペラには拡声装置が使われませんが、国に

よってはミュージカルのように拡声装置を使います。1980年代のことですが、国際会議で訪問したアジアのある国で、拡声装置付きのオペラを鑑賞することになりました。興味深い作品でしたが、その大音量には我慢できませんでした。この上演は、会議の公式プログラムの一部だったので、一幕で帰ることは許されませんでした。日本に帰ってすぐ、こうした状況への準備として耳栓を買いました。

これも1980年代のことですが、お茶の水女子大学の中庭で、あるサークルがガムランの稽古をしていました。建物に囲まれた場所なので、周りに反響して大音響になりました。その中庭に面していた研究室には頭がまったく働きませんでした。その中庭は近隣のマンションからも離れていません。やがて、マンションから「うるさいぞ」という怒鳴り声が飛んできました。私には聞こえましたが、ガムランを演奏している人には届きませんでした。

マンションの住民は、大学の音楽科が中庭で授業をしていたと思ったようです。そのころに音楽科の建物を新設することになり、そのマンションにも説明を行いましたら、音楽科が出す音がうるさいからと言われ、音楽科の建物の位置を変えるように要請されました。

3. 音量に対する姿勢を変える

私はガムランが嫌いなのではありませんし、

音楽様式に優劣をつけたこともありません。第二次大戦で日本が敗北した時に、私は国民学校（今の小学校）3年生でしたから、戦時中に英米の音楽が抑圧されたことを覚えています。家が空襲で焼ける前のことですが、家でピアノを弾いていましたら、窓に石が投げられました。投げた人はピアノの音を敵国英米の音楽と考えたのでしょう。

一方、敗戦になると、占領軍から軍国主義の音楽が禁止されました。敗戦の年の二学期には、担任の先生からアメリカの憲兵が視察に来ると言われて、音楽の教科書から戦争や軍人を題材にした歌を、自分で墨をすって筆で消しました。こうした経験がありますから、私は行政が特定の音楽を抑圧することには反対してきました。

しかし、音楽もサウンドである以上、抑圧されるべき場合もあるというのが私の考えです。敷地の狭い大学では学習・生活の環境を守るために、校庭でのガムランの練習は禁止されるべきです。ドイツに留学していた学生が、昼の時間に自宅でピアノを弾いたため、近所の住民の通告によって、警察の取り締まりを受けました。これも音楽様式の問題ではなく、サウンドの大きさの問題です。

日本の建築家は響きのよいホールを作ることにかけては立派な仕事をしてきましたが、楽屋の音が舞台に漏れるのを防ぐとか、異なる階にあるホールの音が他のホールに聴こえないよう

にする、といったことには熱心でないように見えます。自宅の防音については、私は建築家の防音対策に失望した経験があります。見たところ豪華でも、防音・遮音が不十分なマンションがあります。

音楽の方にも問題があります。西洋社会は19世紀以降、音楽のサウンドを大きくする傾向を強めました。合奏の規模が大きくなり、ヴァイオリンでもピアノでも大きな音量を出せる楽器が高く評価されるようになりました。日本音楽でも、三味線・箏・尺八などの大合奏をよしとする傾向が生まれました。

また、電気を使用できる国では、拡声装置が利用されます。拡声装置による大音量の音楽は、拷問に使われてきました。

これからは、音楽のサウンドについて、「大きさを以て貴しとする」という観念を捨て、「小さくてもよい」、という発想をもつことが必要だと思えます。1970年代に東京に招いたフィリピンのカリングの人びとは、口で吹く笛の他に鼻で吹く笛をもっていました。彼らは、鼻笛は音量が小さいからよいのだ、と言っていました。同じことは、他の楽器にも当てはまるでしょう。

私には二つの夢があります。第一は、家庭での使用のために、響きに優れ、しかも音量の小さいピアノが開発されることです。そして、第二は、演奏者と周囲の人々のために、防音方法についての優れた研究が進むことです。